

課題名：みやざき地頭鶏の育成率アップを目指した環境スマート技術の導入

実証団体等名：みやざき地頭鶏事業協同組合

導入技術

RICOH EH 環境センサー：

鶏舎内の環境データ（温湿度、照度）を常時測定し、クラウド経由で管理者へ通知し最適な育雛条件を設定する

目標

ひな鶏舎（育雛舎）の育成率向上

実証の成果

EH 環境センサー（2農場 3, 300羽、実証期間12月～3月）

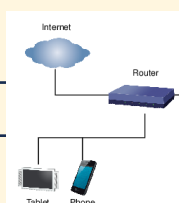
- ・鶏舎構造の異なる2農場で育雛期間（1ヵ月）を各2ロット調査した。温湿度等のデータをチェックしながら育成したところ急激な変化はなく良好な育成率となった。
- ・ひな育成率アップに向けて育雛鶏舎の温湿度変化やひなの給餌行動のデータが得られたことは、県畜産試験場が作成した「みやざき飼養管理マニュアル」を商業農場で実証した結果となり、今後の同マニュアル普及定着と改善に向け大きな成果が得られた。



鶏舎構造の異なる2農場で実証



1ヵ月後調査



入雛後の温湿度変化をリアルタイムで把握

みやざき農業DX事業調査結果（詳細）

		N農場		A農場	
導入月日		2023/12/28	2024/1/27	2024/1/5	2024/2/5
ひな導入時	現存羽数	1,224	1,052	2,000	2,000
	調査日	2023/12/28	2024/1/27	2024/1/5	2024/2/5
1ヵ月調査	体重	40.85	41.46	37.00	39.26
	現存羽数	1,204	1,034	1,955	1,981
	調査日	2024/1/27	2024/3/1	2024/2/14	2024/3/5
	日齢	30.0	34.0	40.0	29.0
	育成率	98.4%	98.3%	97.8%	99.1%
	平均体重	649.7	816.0	1192.0	686.0
	標準偏差	94.7	137.8	105.2	66.9
CV	14.6	16.9	8.8	9.8	
DG(増体/日)	20.3	22.8	28.9	22.3	

考察

- 1 ひなの保温状況を測定することで、育成舎構造の特徴（半開放式、閉鎖式）を数値化することができた。
- 2 半開放式の育成鶏舎（N氏）では保温条件を改善することで増体の向上が見られた。
- 3 鶏舎構造だけでなく、ひなの状態の違いにより育成率の差が見られた（体重以外にも虚弱等の要因あり）。
- 4 今後は温度管理、照度管理を徹底することで、初期の育成率の大幅改善が期待できる。
- 5 鶏舎により放飼場後の生育に差があるので、今後は放飼場鶏を含めた環境改善が必要と思われる

普及に向けた課題

- ・出荷時点の育成率向上には、成鶏舎・放飼場を含めた全体の飼育環境調査が必要となるが、農場毎に鶏舎構造や放飼場面積等が大きく異なるため、今後は育雛舎・成鶏舎・放飼場を含めた「飼育環境（施設）のパッケージ化」が課題である。